

帝国の終焉

—スパルタ帝国の解体の最終プロセス— (三)

中井 義明

はじめに (『社会科学』七十二号)

- I. 研究史
 - II. 前三七一年から前三七〇年にかけての事件と動向
 - III. 前三六九年の事件
 - IV. 前三六八年の事件
 - V. 前三六七年の事件
 - VI. 前三六六年の事件 (『社会科学』七十三号)
 - VII. 外交と党派の分析
 1. スパルタ
 2. ペロポネソス同盟諸国 (以下本号)
 3. アルゴス
 4. アテーナイ
 5. ボイオーティア
- 結論 (次号以降)

2. ペロポネソス同盟諸国

ペロポネソスはスパルタ帝国を支える金城湯池であった。ペロポネソスにはコリントスを筆頭にシキュオンやプレイウスなどのイストモス諸都市、ペッレーネーなどのアカイア諸都市、マンティネイアやテゲアなどのアルカディア諸都市、エーリスなどの前六世紀以来の同盟諸国があった。マンティネイアやエーリス、コリントスのようにスパルタの帝国政策に抵抗した都市もあったがそれも短期の現象であり、多くは政治的信条からスパルタに心を寄せる寡頭派が政権を独占していた¹⁾。また、かつてコリントス戦争前にコリントスの人ティモラオスが指摘したように²⁾、スパルタが必要とする豊富な人的資源を同盟軍として提供して来たのもペロポネソスの同盟諸国であった。

自らの子弟をアゴーゲーと呼ばれるスパルタの教育訓練に参加させ、スパルタ軍の一翼を担ってきたのは同盟諸国の寡頭派であった³⁾。彼らは民主派に対する強い警戒心と敵意を抱いていた。レウクトラの戦いの後、ペロポネソスの寡頭派がアル

カディアやアルゴス、エーリス及びボイオーティア連合の重圧に耐えてスパルタとの同盟関係を維持しようとしたが、その理由を窺わせる記述がディオドロスにある⁴⁾。

七〇年代に入ると民主派による騒擾が平和条約の締結をきっかけとして頻発するようになる。ディオドロスは前三七五年の平和条約締結の後ピガレイア、コリントス、メガラ、シキュオン、プレイウスで民主派の革命があったと述べている⁵⁾。ディオドロスが伝える騒擾を研究者はレウクトラ以降の時期に置き換えているが、必ずしも確実とは言えない⁶⁾。ロイによると、ピガレイア、コリントス、プレイウスは革命ではなくて亡命者が引き起こした騒擾であり、メガラとピガレイアは民主派ではなく寡頭派が引き起こした事件である⁷⁾。

スタイリアヌーの提言が妥当であるとするなら、ペロポネソスの寡頭派は元々存在していた民主派への敵対心に加え、前三七五年の平和条約がもたらした騒擾を苦い経験として記憶にとどめ⁸⁾、テゲアにおける最近の事件に新たに危機感を募らせながら⁹⁾、民主派亡命者とそれを支援するアルゴスやアルカディアの圧力に抗するためにスパルタとの関係をますます緊密にしていったことになる。そのことはアルカディアによる力づくの圧力に徹底的に抵抗しながら、エパメイノンダスの寡頭派政権温存を約束する説得には従うというシキュオンやアカイアの寡頭派の行動に良く示されているように思われる。

レウクトラの後、ペロポネソスではスパルタに抑圧されていた民主派の活動が活発となり、アルゴスでは革命が起こり、コリントスやメガラは民主派亡命者たちの攻撃を受け、シキュオン、プレイウス、アルカディア西部では内紛が生じている¹⁰⁾。スパルタの庇護下に長年権力の座にあった寡頭派の虐殺や追放が生じている¹¹⁾。伝統的にアルゴスと強いつながりを持つ民主派に対抗する為にもスパルタとの緊密な関係は寡頭派にとって重要であった¹²⁾。コリントスやプレイウスなどの諸都市が自らも困難な状況にある中でスパルタ防衛に協力し¹³⁾、スパルタが行動の自由を認めるまで戦線に留まったのもその為である¹⁴⁾。

アルカディア

アルカディアはスパルタの膝元ともいえるペロポネソスの中央部にあり、スパルタとは直接国境を接し、スパルタとコリントスやメガラなどのイストモス諸国を結ぶ陸路が走っておりスパルタにとって戦略的に重要な地域であった。スパルタはこれまでアルカディアが単一の政治勢力のもとに統一されるのを極度に警戒してき

た。その為にアルカディア諸都市の分断化を図り、個々の諸都市とは寡頭派と連携することによってアルカディアを自己の統制下に置いてきたのである。

しかし、レウクトラとその直後に結ばれた平和条約はスパルタによるアルカディア支配を根底から揺るがすことになった。平和条約によってスパルタはこれら諸都市への干渉を禁止され、スパルタに敵対していた亡命者がそれぞれの都市に帰国することを容認せざるを得なくなっていた。また、アテーナイが提唱した平和条約の誓約をエーリスが拒否したことは同盟に亀裂が生じ、解体の兆しが表面化してきたことを示している。スパルタの権威と権力がもはや同盟諸国の間で絶対的ではなくなっていたのである。

前三七〇年に入るとアルカディアにおける変革の動きは急速に表面化してくる。寡頭派政権を支えていたハルモステスや駐留部隊は姿を消しており、亡命していた民主派指導者たちは帰国していた。いくつかの都市において政権を独占してきた寡頭派と政権から排除されてきた民主派の力関係は逆転していた。もはやスパルタが直接干渉できる状況ではなかったのである。

ペロポネソスの状況についてはロイがその特徴を要約している¹⁵⁾。多くの都市において民主派と寡頭派が権力をめぐって争っており、マンティネイア、テゲア、アルゴス、プレイウス、シキュオン、ペッレーネーを含むアカイア、コリントス、それにエーリスにおいて深刻な党争が生じたと指摘している¹⁶⁾。そして同盟こそが自己の最も優れた支援と考えられ、民主派はアルカディアと、寡頭派はスパルタと同盟を結んだのである¹⁷⁾。この党争において国制の形態は大きな争点とはならず、寡頭派も民主派も既存の制度的枠組みの中で争っている¹⁸⁾。彼らは権力獲得をめぐって、異なった政策をめぐって争ったのであって、政治体制をめぐって争ったわけではなかった¹⁹⁾。

平和裏に合法的に民主派への政権移行が行われたマンティネイア、外部の勢力と手を組み暴力的に民主派政権を樹立したテゲア、外的状況の変化に応じて立場を変えていったパツランティオン、あくまでスパルタとの同盟関係を捨てようとしなかったオルコメノスやヘライアの四つのパターンがある。アルカディアでの民主派革命と連合の成立は数多くの寡頭派亡命者を生み出した²⁰⁾。

変化はマンティネイアに始まった²¹⁾。民主政を基盤とし²²⁾、パツラシア地方を属領とする²³⁾ マンティネイアの独自の支配圏をスパルタはペロポネソス戦争中に解体していた。スパルタがコリントス戦争後の前三八五年に都市を解体し民主政を廃し

て以来²⁴⁾、マンティネイアは寡頭政の下にあった。しかしレウクトラ後の平和条約によって民主派指導者たちが帰国すると状況は大きく変化する。民主派は政権の座に復帰し、民主政が復活したのである²⁵⁾。民主派の復権はマンティネイア市の再建と市壁の再構築によく示されている。スパルタの使節に民会での発言を許さず²⁶⁾、市壁の再構築についてのスパルタの提案を拒否している²⁷⁾。

テゲアはオルコメノスやヘライアと並んでアルカディアにおけるスパルタの拠点の役割を演じてきた²⁸⁾。前三七〇年において、寡頭派はスタシポスに、民主派はプロクセノスとカッリビオスに指導されていた²⁹⁾。テゲア国内で主導権を掌握していたのは親スパルタ寡頭派であった。テゲアにおける親スパルタ寡頭派の支配は極めて長期に及び、安定していた。貧民層の不满を見出すことは出来ない³⁰⁾。事実、民衆は民主派によるクーデタにまったく関与していない³¹⁾。民主派は聖使会議において敗れ³²⁾、最初の武力衝突でも敗れている³³⁾。民主派に寡頭派支配を合法的に覆すだけの力量はなかった。その民主派によるクーデタを成功させたのはマンティネイアからの援軍であった³⁴⁾。降伏した寡頭派は処刑されたが³⁵⁾、クセノポンによれば八〇〇名、ディオドロスによれば一四〇〇名の寡頭派がスパルタに亡命している³⁶⁾。

パツランティオンはテゲアの西南西約六マイル(約一〇キロ)、マイナロス山系の狭小な扇状地に位置する。地政学的にテゲアとの緊密な関係が想像できる³⁷⁾。闘争に敗れたテゲア寡頭派はパツランティオンに逃亡している³⁸⁾。これまでのテゲア寡頭派とパツランティオンとの長い密接な関係を頼みとしたのであろう。しかし彼らは裏切られることになる。「さて、パツランティオンの人々に裏切られたこれらの人々」というディオドロスの句³⁹⁾はテゲアから追跡者が現れることによってパツランティオン人の態度が変化したことを示している。追跡者の出現が政策変化の動機であり理由であった。パツランティオンは外的状況の変化に受動的に取り組みざるを得ない小都市を典型的に示している。

それぞれの都市内部の党派対立のほかに、都市間の対立も深刻であった。マンティネイアとテゲアの対立は前世紀以来のものだし、オルコメノスとクレイトルの間にも対立が生じていた⁴⁰⁾。トンプソンはマンティネイアとテゲアの対立がアルカディアの政策の揺れに反映されているとし⁴¹⁾、そのトンプソンの指摘に基づいてカートレッジはアルカディア連合にはその内部に孕まれている様々な緊張によって分裂していくもろさがあると論じている⁴²⁾。

オルコメノスは歴史的にマンティネイアと敵対していた⁴³⁾。オルコメノスは同時

に北アルカディアのクレイトルとも敵対していた⁴⁴⁾。オルコメノスの防御能力の脆弱さは既に証明済みであった⁴⁵⁾。ポリュトロポスの傭兵隊のオルコメノス設置は、スパルタの指示によるのかオルコメノスの要請によるのかを別としても、オルコメノスにとって歓迎すべきことであったに相違ない。マンティネイアの圧力は早速アゲーシラーオスのスパルタ軍がエウタイアに滞在している間に現実のものとなる。マンティネイアはオルコメノスに遠征軍を派遣しているのである⁴⁶⁾。オルコメノスはポリュトロポス揮下の傭兵隊や恐らくプレイウスの騎兵部隊の協力を得てマンティネイアを撃退するのに成功している。

アルカディア西部に位置するヘライアはエーリス南方のトリピュリア地方に特殊な利害を有していた。この地方は失地回復を目指すエーリスによって脅かされていた。ヘライアがトリピュリアにおける利害に固執する限りエーリスとの妥協はありえず、スパルタとの関係維持は必至であった。その為に反スパルタの旗幟を鮮明とするアルカディアの圧力を被ることとなった。アゲーシラーオスが率いるスパルタ軍がアルカディアから撤退した後、アルカディアはエーリス人やアルゴス人と共にヘライアへ懲罰の遠征を行っている⁴⁷⁾。遠征軍はヘライア領を破壊したが、ヘライアは抵抗を続けたのである。

コリントス

ペロポネソス東北部における同盟の中心都市はコリントスであった。イストモス地峡部を扼しているという戦略的位置のみならず、ペロポネソス東北部におけるスパルタの残された同盟諸国のオピニオン＝リーダーとして影響力を行使し続けたことは重要である。その理由としてコリントス戦争中の民主派による革命と虐殺、そしてアルゴスとの合同の経験が考えられる⁴⁸⁾。

バシメロスひきいる寡頭派亡命者がポリスを取り戻したのはスパルタが推進した『大王の和約』のお陰であった⁴⁹⁾。アルゴスには「虐殺の張本人とその行為に手を貸した人々 (hoi men sphageis kai hoi metaitioi tou ergou)」とクセノポンが呼ぶ民主派指導者やアルゴスとの合同を推進した寡頭派指導者が亡命していた⁵⁰⁾。彼らにはコリントス市内に「身内や友人 (oikeion kai philon)」がいた⁵¹⁾。ディオドロスの記述が正確ならば、コリントスは前三七五／四年にアルゴスに亡命していた民主派の帰国にまつわる騒動を経験している⁵²⁾。それだけに寡頭派がアルカディアやアルゴス、ポイオーティアに強い不信感を抱き、民主派に対する敵意からスパルタとの同

盟を堅持し続けたのは当然であったと言えよう。

レウクトラの後、スパルタはボイオーティアからの撤収部隊収容の為にイストモスにアルキダーモスを派遣しているが、コリントスは他のペロポネソス同盟諸国と共に部隊を提供している⁵³⁾。その協力振りはレウクトラの同盟軍とは対照的に「熱心 (prothymos)」かつ「大胆 (erromenos)」とクセノポンが形容するほどであった。アルカディア諸都市の脱落、度重なるボイオーティア連合軍の国土蹂躪、シキュオンのエウプロンやアルゴス、アルカディアの圧迫にもかかわらずコリントスはスパルタとの同盟を堅持し続けたのである。

コリントスはスパルタの外交戦略にも大きく寄与している。とりわけアテーナイの支援を引き出し、アテーナイとの同盟を推進していく上でコリントスが果たした役割は重要であった。エパメイノンダスの第一次ペロポネソス遠征によってスパルタの存続そのものが危機にさらされたとき、平和条約のアウトノミア条項がテーバイによって蹂躪され、「危害を受けている (adikoumenois)」⁵⁴⁾というクレイステレスの指摘によって、ようやくアテーナイはスパルタ支援を決断したのである⁵⁵⁾。同時にコリントスはプレイウスやシキュオンなどの同盟諸国と共にスパルタ防衛の為に援軍を派遣している⁵⁶⁾。

コリントスは共通平和による覇権獲得というテーバイの目論見を挫折させている。前三六七年の平和条約はメッセニアのアウトノミアというスパルタにとって絶対認められない条項を含んでいた。平和条約によってギリシアにおける覇権を確保しスパルタを孤立させようというテーバイの試みは挫折してしまった⁵⁷⁾。

コリントスはボイオーティア軍のペロポネソス進出を阻止する戦略拠点であった。アテーナイやスパルタとともにコリントスはボイオーティア軍に対する阻止線を構築している⁵⁸⁾。アテーナイはイピクラテスやカブリアスという有能な指揮官をコリントスに派遣している。イピクラテスは前三六九年春にケンクレアイにおいてボイオーティア軍の撤退を妨害しようと試みているし⁵⁹⁾、同年夏にはカブリアスがボイオーティア軍の第二次ペロポネソス進攻を阻止する為にイストモスに防衛線を構築している⁶⁰⁾。

コリントスはその防衛をアテーナイに全面依存するようになる。その契機がエパメイノンダスの第二次遠征であった。エパメイノンダスはコリントス攻略を企て、戦いに敗れたコリントス人は戦意を喪失し、コリントスは陥落寸前の危機に陥ってしまった。カブリアスがこの危機を救い、エパメイノンダスを阻止するのに成功し

ている⁶¹。膠着状態に陥ったエパメイノンダスは結局コリントス攻略を断念している⁶²。この事件以降コリントスにはアテーナイの傭兵部隊が配備されるようになる。前三六六年のプレイウス攻防戦の折にカレースがコリントスに駐留しており⁶³、その傭兵部隊はコリントス領内各地の要衝に展開していたのである⁶⁴。

それは同時にコリントスの独立を脅かす危険性をはらんでいた。アテーナイはコリントスを占領してアテーナイの便宜に供しようという計画を企んだのである⁶⁵。しかし事前に情報が漏れコリントスを占領しようというアテーナイの企ては失敗してしまっただ⁶⁶。コリントスはアテーナイ兵に報酬を与えて退去させている。

アテーナイを欠いてコリントスを単独で防衛するのは不可能であった。コリントスはボイオーティアに和平の可能性を打診している⁶⁷。ボイオーティアの同意を得た上で⁶⁸、コリントスはスパルタに単独講和の承認を求める使節を派遣している。スパルタはコリントスの要求を認め、ペロポネソス同盟からの脱退を認めたのである⁶⁹。ボイオーティアはコリントスに対して同盟条約の締結を要求したが、コリントスはこれを拒否している⁷⁰。

レウクトラ以降の一連の過程の中でコリントス寡頭派はプレイウスなど同盟諸国寡頭派のオピニオン＝リーダーであり続けた。その背景についてサーモンはもはや干渉する能力を全く持たないスパルタを取るのか、その意図ははっきりしないがその意図に強い懸念が抱かれるボイオーティアを取るのかという選択の問題があったことを指摘している⁷¹。民主革命と民衆に対するコリントス寡頭派の警戒の念が働いていたのである⁷²。この意味においてコリントス寡頭派は民主派との闘争と脅威、それを支援する近隣のアルカディアやアルゴスの圧力という危機を同盟諸国の寡頭派と共有していたと言えよう。

プレイウス

プレイウス寡頭派はスパルタの有力者、とりわけスパルタ王と極めて強固な関係を築いていた⁷³。ポダメノスの党派の人々は故アルキダーモス王の賓客であったし、プロクレスの党派の人々はアゲーシラーオス王の賓客であった⁷⁴。彼らが亡命を脱して祖国に帰国を果たし、民主派の手から政権を奪取したのはスパルタのお陰であった⁷⁵。プレイウス寡頭派は強固であったが、前三七五／四年の民主派亡命者による騒擾を経験している⁷⁶。亡命者たちは傭兵を擁してプレイウス領に攻め込み砦の一つを占領している。

レウクトラ以降の困難な状況の中で外交面と軍事面でプレイウスが果たした役割は非常に重要である。国境を接するアルゴスとアルカディア連合はプレイウスに対する侵攻を繰り返し、民主派亡命者と市内に残留していた民主派は提携して寡頭派体制を倒壊させようと画策していた⁷⁷⁾。そのプレイウス寡頭派を指導したのはプロクレスであった。彼はテーバイがアテーナイと「敵対している (dysmeneis ontas)」と指摘することによって、スパルタ支援を渋るアテーナイを説得するのに大きく貢献している⁷⁸⁾。同時にプレイウスはコリントスなどのイストモス諸国と共にエパメイノンダスのラコニア侵攻からスパルタを守る為に援軍を派遣しているのである⁷⁹⁾。エパメイノンダスの侵攻軍がペロポネソスから引き上げた後、スパルタはアテーナイとの同盟を求めて使節を派遣するが、プレイウスは他の同盟諸国と共に使節をアテーナイに派遣している⁸⁰⁾。その為にプレイウスはアルゴスの攻撃を受けている⁸¹⁾。その後、包囲下に陥ったプレイウスは糧食確保にも困難な状況にあった⁸²⁾。とりわけ前三六六年には亡命者とボイオーティア人やシキュオン人、ペッレーネー人の侵攻を受け、全市を挙げての防戦で辛うじて撃退するのに成功している⁸³⁾。この事件はクセノポンに深い感銘を与えたようである。

シキュオン

シキュオンは前三七五／四年のペロポネソスにおける騒擾を経験した都市のひとつである。一部の人が革命を企て失敗して処刑されたとディオドロスは伝えている⁸⁴⁾。それだけに民主派に対する警戒心は寡頭派の間には強かったことであろう。しかしシキュオンはエパメイノンダスの第二次ペロポネソス侵攻による敗戦と混乱の中でスパルタとの関係を絶っている。ボイオーティア、アルカディア、アルゴス、エーリスの侵攻を受けてシキュオンは指導者を失い⁸⁵⁾、ポイビアを占領されてしまった⁸⁶⁾。恐慌状態に陥った寡頭派は⁸⁷⁾、民衆の蜂起を恐れ、寡頭政の存続を条件に降伏したのである⁸⁸⁾。

その後続くシキュオンの政変についてグリフィスは寡頭派内部の対立と見ている⁸⁹⁾。エウプロンのクーデタまで、シキュオンは寡頭派体制の中で親スパルタ派と「親テーバイ派」が争っていた。結局、この権力闘争で親スパルタ派が敗れて追放され、「親テーバイ派」が政権を掌握したのである⁹⁰⁾。グリフィスはエウプロンが親スパルタ寡頭派に属していたとし、失った地位を取り戻す為に民主派に鞍替えし「親テーバイ派」に復讐しようとしたと考えている。

確かにエウプロンは元来寡頭派の有力者であった⁹¹⁾。彼が民主派に転向したのは前三六七年の政変直前である。寡頭派内部の権力闘争で「親テーバイ派」が親スパルタ派を追放し、それを受けてエウプロンがクーデタを行って「親テーバイ派」に報復したというグリフィスの見解は受け入れられない。彼はアルカディアとアルゴスの協力を得て寡頭派指導者である「最も富裕な人々 (hoi euprotatoi)」を「スパルタ最良の廉で (epi lakonismos)」追放し⁹²⁾、民主政を樹立した⁹³⁾ だけではなかった。その刃は民主派にも向けられている。同僚の有力民主派を処刑したり追放したりするのに成功しているからである⁹⁴⁾。これらの人々は「最も有力な人々 (hoi kratistoi)」や「法令抜きに追放された人々 (hoi aneu dogmatos ekpeptokotes)」と呼ばれる⁹⁵⁾。このようにして彼は僭主にのし上がったのである⁹⁶⁾。彼は最後にテーバイにおいてシキュオン人亡命者の手で暗殺されている⁹⁷⁾。

注目されるのはシキュオンの民衆 (hoi pleistoi/ hoi politai) が暗殺後もエウプロンを善人 (andros agathos) と評価し、都市創建者 (archegetes tes poleos) として崇拜し続けたという事実であろう⁹⁸⁾。エウプロンはアカイアの政変によって生じた国際的な緊張と富裕者に対する民衆の反目を利用して革命を扇動したのである⁹⁹⁾。

アカイア

アカイアは前四一七年以来親スパルタ寡頭派によって支配されてきた¹⁰⁰⁾。彼らがスパルタとの同盟に固執したのは寡頭派体制の維持にあったことは前三六七～三六六年の一連の事件によって明らかとなる。ディオドロスはアカイア人がカリュドンとナウパクトス、それにデューメーに警備隊を置いていたことを伝えている¹⁰¹⁾。スタイリアヌーによるとカリュドンとナウパクトスに置かれていた警備隊はその領有を主張するアイトリア人に対するものであったし、デューメーに置かれていた警備隊はアルカディアの支援を受けている民主派の襲撃に対処するものであった¹⁰²⁾。

カートレッジはエパメイノンダスがアカイア諸国に干渉しなかったことを賢明な処置であったと評価している¹⁰³⁾。外交的には確かに賢明な措置と言えるが、国内的には民主派の、そして先鋭化した民主化政策をとるアルカディアに危機感を抱かせるものであった。エパメイノンダスの政策はアルカディアと「反対派の人々 (hoi antistasiotai)」の反発を招いたのである。彼らの批判は寡頭派の温存がスパルタの利益につながるというものであった¹⁰⁴⁾。アカイアに対するエパメイノンダスの政策は撤回され、ボイオーティアはハルモステスをアカイアに派遣し直接干渉させてい

る。「大衆 (ho plethos)」の協力を得て「貴人 (hoi beltistoi)」や「有力者 (hoi kratistoi)」を追放し、寡頭政を廃止している¹⁰⁵⁾。

追放された寡頭派の反撃はすばやかだった。勢力を結集すると、それぞれの都市に向かって兵を進め、復帰している¹⁰⁶⁾。アカイアの諸都市は寡頭政に戻り、アルカディア連合への敵意からスパルタとの同盟に復した¹⁰⁷⁾。

エーリス

エーリスは民主派の指導の下にあった。エーリス戦争を指導したのは民主派のトラシュダイオスの党派であったが、その支配はエーリス戦争後も揺るぐことがなかった。何故ならエーリス戦争においてスパルタは民主政の解体を要求していないし、スパルタに亡命していたクセニアス派の人々の帰国も要求していないからである¹⁰⁸⁾。即ち、エーリスの民主政はその中に寡頭派を含みながら民主派が指導権を掌握するという体制を維持したのである。アルカディアのように民主政のイデオロギーは外交の指導理念とはなり得ず、この点に関してはエパメイノンダスが指導するボイオーティアと共通するところがあった。

エーリスはエーリス戦争で南部の従属領を失っていた¹⁰⁹⁾。プリクサ、トリピュリア、エピタリオン、レトリノス、アムピドロス、マルガネ、アクロレイア及びエペイオンがそれである。これら従属領の回復がエーリスの悲願であった。前三七一年にアテーナイで開かれた平和会議でエーリスが誓約を拒否したのは平和条約に含まれる自治条項がこれら失地回復の妨げとなるからであった¹¹⁰⁾。レウクトラ後の情勢変化を利用してエーリスはすばやく対応している。エーリスはエーリス戦争で失った領土回復に第一義的な重点を置いていた。その為にアルカディアに協力し、アルゴスやボイオーティアと共同歩調を取り、スパルタとの戦いを推進したのである¹¹¹⁾。マルガネやスキッロスは早い段階で回復していたが、さらに南のトリピュリア、またラシオンについてはアルカディアとの間にその帰属をめぐる係争が持ち上がるのである¹¹²⁾。アルカディアがその領域を西方に拡大し、アクロレイア、ピサティス、トリピュリアを連合に編入すると状況は大きく変化する¹¹³⁾。エーリスはこの措置に抗議しているが、住民がアルカディア人であるという理由で却下されている。南部従属領をめぐる対立がエーリスとアルカディアとを疎遠なものとしてしまった。スパルタ軍のパッラシア侵攻に対してアルカディアはアルゴスと共にこれを捕捉すべく軍を動員し、メレア付近でいわゆる「涙のない戦い」を戦っている¹¹⁴⁾。エーリス

はこの戦いに兵を提供しなかったばかりか、アルカディアの蹉跌をボイオーティアと共に歓迎しているのである。

エーリスはボイオーティアとの連携を密にしつつ、アルゴス、アルカディアとは一線を画している。その結果、スーサにおけるペルシア王との交渉でボイオーティアの代表ペロピダスはエーリスの主張を全面支持し、トリピュリア、アクロレイア、ピサティスのエーリス帰属を提案している¹¹⁵⁾。アルカディアの使節が帰国後で不満の意を表明したのに対して¹¹⁶⁾、エーリスの代表はペルシア王の行為を称賛しているのである。テーバイによる平和条約交渉にエーリスはメッセネと共に賛同している¹¹⁷⁾。

3. アルゴス

アルゴスはペロポネソスにおける数少ない民主制ポリスであった。アルカディア連合が成立するまでアルゴスはペロポネソスにおける唯一の民主派亡命者の拠点であった¹¹⁸⁾。レウクトラにおけるスパルタの敗北はアルゴスに影響力拡大の見込みを提供していた。そして将にその時にアルゴスにおいてスキュタリスモスと呼ばれる革命が生じ、一二〇〇名以上の富裕者が犠牲となり民衆を扇動した政治家たちも処刑されている。

アルゴスはペロポネソスの覇権とキュヌリア地方の領有をめぐってスパルタと対立していた¹¹⁹⁾。ペロポネソス戦争中のアルゴスにおける寡頭派革命の背後にはスパルタがあった¹²⁰⁾。スパルタは寡頭派亡命者を利用してアルゴスに圧力を加え続けたのである¹²¹⁾。ペロポネソス戦争後もスパルタはアルゴス国内の寡頭派と関係を持っていた¹²²⁾。『ヘレニカ=オクシュリンキア』は「アルゴスの人々やボイオーティアの人々…の人々は市民の中の敵対派の人々を友人として遇しているが故にラケダイモンの人々を憎んでいた」と記述している¹²³⁾。この憎悪故にアルゴスではキュロン等の民主派がコリントス戦争を推進したのである¹²⁴⁾。

前三七〇年の革命がスキュタリスモスと呼ばれる理由は犠牲者が棍棒（スキュタレー）によって処刑されたことによる。この事件は一二〇〇名以上の富裕者が扇動政治家たちに煽られた民衆によって処刑された流血の惨事で、同時代の人々に大きな衝撃を与えたと言われ、いくつかの史料に言及されている¹²⁵⁾。この革命については古くはスヴォボダの研究があり¹²⁶⁾、八〇年代にはデイヴィッドの研究¹²⁷⁾があるがそれほど多くはない。革命についてはディオドロスが詳しい¹²⁸⁾。

革命は民主派指導者（*tinon demagogon*）による扇動によって始まっている。富

裕者 (ton tais exousiais kai doxais hyperchonton) を標的にした告発が発端であった。告発された者たちが団結して事を謀ったが事前に漏れ、拷問の脅しに追い詰められて多くは自殺したのである。さらに三〇名もの著名人 (ton epiphanestaton) が密告により処刑され、最終的には一二〇〇名以上の富裕者 (megaloplouton) が処刑されただけでなく、大衆 (to plethos) を煽ってきた扇動政治家の全て (hapantas tous demagogous) が群衆 (hoi ochloi) の怒りを買って処刑されてしまったのである。

このディオドロスの記述は富裕者に対する民衆の不信感と憎悪の強さ、一旦事が始まると革命を制御することの難しさを露呈し、事態を收拾しようとした扇動政治家が逆に民衆の怒りを買って処刑されてしまうという古典期ギリシアの革命の典型的な特徴を明らかにしている。スタイリアヌーはスキュタリスモスの犠牲者がスパルタとの戦争を望まず、アルカディア問題に関与しないよう試みていたのだらうと推測している¹²⁹⁾。勿論、フックスが考える社会経済的な、富裕者と貧民という対立が強い要因となっていることを認めている。フックスは富裕者の財産を分配するのが目的だったと見ている¹³⁰⁾。デイヴィッドはこの革命がアリストテレスの革命モデルに見事に適合していると指摘する¹³¹⁾。そしてレウクトラの敗北によって民主派のスパルタに対する恐怖心が薄れてしまったことが寡頭派に対する敵対心を一気に表面化させてしまったと考えているのである¹³²⁾。その際、三〇年も前の未遂に終わった寡頭派の陰謀を敵対派弾圧の口実に使ったと言う¹³³⁾。

スキュタリスモスが寡頭派に対する民主派の弾圧事件であったのかどうかははっきりしていない。というのは、史料はaristoiとかoligoiという寡頭派を直接指す政治的用語を用いておらず、富裕者とか名望家という社会経済的用語を用いているに過ぎないからである。一般的には富裕者や名望家が寡頭派と密接な関係にあると考えられるが、彼らが寡頭派であるとするのは一般論からの間接的推論でしかない。それに一二〇〇名とか一五〇〇名という犠牲者の数はひとつの党派というよりはひとつの社会階層に匹敵する規模と言って良く、この事件を寡頭派に対する民主派革命とする研究の潮流には疑問が残る。

アルゴスの寡頭派がこのスキュタリスモスによって壊滅的な打撃を被ったかどうかは分からないが、皆無となったわけではない。相当数の寡頭派がスパルタに亡命している。エパメイノンダスのラコニア侵攻のときに約五〇〇名のポイオーティア人やアルゴス人亡命者がスパルタ防衛に加わっているからである¹³⁴⁾。

4. アテーナイ

アテーナイのテーバイに対する姿勢は三七〇年代後半に入り劇的に変化していた。アテーナイがスパルタとの果てしのない消耗戦に苦しんでいる間に、テーバイはボイオーティアにおいて着々と地歩を固め、プラタイアやテスピアイを破壊していた。古くからの同盟国であるプラタイアやテスピアイの破壊はテーバイへの失望を掻き立て、アテーナイ人が「最早テーバイ人を賞賛するようなことはなくなっていた (ouketi epeinou tous Thebaious)」のである¹³⁵⁾。アテーナイはスパルタと戦争を続けることに「恥じと感じ (eischynonto)」, 戦争を「利益とはならない (asymphoros)」と看做すようになっていた。テーバイが古くからの友好国であるポーキスに遠征し、ペルシア戦争を共に戦った諸都市を「破壊している (aphainizontas)」のを目の当たりにして、アテーナイはスパルタとの和平交渉を「民会決議し (psephisamenos)」, スパルタに使節を派遣したのである¹³⁶⁾。

このようなアテーナイにおける雰囲気の変化がレウクトラの勝報をもたらしたテーバイの使節に対するアテーナイの冷淡な態度に良く表されている¹³⁷⁾。またレウクトラの戦いの後アテーナイで開かれた平和会議は各国の平和と安全を保障しようというものであり、結果として現状維持を謳い、アテーナイをスパルタに一層接近させることとなった¹³⁸⁾。

それでもアテーナイのスパルタに対する不信は根強いものであった。エバメイノンドラスの第一次ペロポネソス遠征という事態に直面してスパルタとその同盟諸国が支援を求めたとき、アテーナイは使節の言い分の全てを受け入れたわけではない。使節の発言に対する不信感を表す「ざわめき (throu)」が囁かれたのである¹³⁹⁾。最終的にアテーナイは同盟にまでスパルタとの関係を発展させていく¹⁴⁰⁾。しかし、スパルタに対するアテーナイのわだかまりを解消し得なかったことは五日ごとの指揮権交代を主張するケーピソトスの意見がアテーナイの民会を通過したことによっても推測できる¹⁴¹⁾。

このようなアテーナイにおける雰囲気の変化、外交戦略の変化をロイは勢力均衡論の立場から評価している¹⁴²⁾。ロイによれば、ボイオーティア戦争中、アテーナイはテーバイに対する不信感を募らせていた。テーバイによるプラタイアの破壊、テッサリアやエウボイアへのテーバイの関心の拡大はアテーナイの戦略的利益に直接抵触するものであった。アテーナイは戦いに敗れたスパルタよりも戦いに勝利したテーバイへの警戒心を高めていたのである¹⁴³⁾。

クセノポンは対スパルタ感情と政策の党派毎の違いをスパルタにおける三人の使節の演説によって見事に描いている¹⁴⁴⁾。ヒッポニコスの子カッリアスはアテーナイの伝統的エリート層に属し、代々スパルタのプロクセノスを務め、戦時においては将軍に選ばれ和平の時には使節として派遣されてきている¹⁴⁵⁾。彼自身これまで二度使節に任命されている。プラタイアとテスピアイの破壊に言及してテーバイを批判し、これら都市に生じた出来事に心を痛める (achthomenous) アテーナイもスパルタも敵同士であるよりは友であるべきだと主張する¹⁴⁶⁾。このカッリアスは親スパルタ派と呼びうるものを代表していたと考えられる。

カッリアスとは対照的にスパルタが諸都市の「自治にとって最大の障害物 (malista empodon tei autonomiai)」となっていると指摘し¹⁴⁷⁾、同盟軍指揮の独占やデカルキア設置、カドメイア占領などのスパルタの帝国政策を批判し¹⁴⁸⁾、親ボイオーティア的意見を表明するのがアウトクレスである¹⁴⁹⁾。シーリーによると彼はアリストポンの友人である¹⁵⁰⁾。アリストポンはボイオーティア最良で有名であった¹⁵¹⁾。しかしこの時はカッリストラトスが進める和平交渉に協力していた¹⁵²⁾。アテーナイが同盟国であるテーバイに配慮し、スパルタと和平交渉をする前にテーバイに使節を派遣し和平交渉への参加をうながしたのはアリストポンであったと思われる¹⁵³⁾。さて、ここで重要なのはスパルタへの使節団の中にアウトクレスの他にアリストポンの息子デモストラトスが含まれていることである¹⁵⁴⁾。

カッリクラテスに職業的用兵家のイピクラテスやカブリアスがいたのと同じように、アリストポンには職業的傭兵家としてカレースがいた¹⁵⁵⁾。カレースはティモマコスがボイオーティア軍阻止に失敗したのを受けてコリントス派遣部隊の指揮官に選ばれている。プレイウス攻防戦時にアテーナイ部隊の指揮官としてコリントスに駐留していたカレースはプレイウス人の求めに応じて食糧をプレイウスに搬入するのに成功している¹⁵⁶⁾。コリントス占拠をアテーナイが企てたときは、その計画を実施することは出来なかった¹⁵⁷⁾。

三人目の発言者として平和の必要性を訴えたカッリストラトスはカッリアスやアウトクレスとは違った観点、即ち現実政治における得失という観点から意見を展開する。「ある同盟国が我々にとって受け入れがたいことを行っている (ton symmachon tines ouk aresta prattousin hemin)」とテーバイを仄めかしながら¹⁵⁸⁾、戦争を「過ち (ton hamartematon)」と指摘した上で¹⁵⁹⁾、「数多くの凶事によって疲弊困憊してしまう (hypo plethous kakon apeipomen)」ときを待つ理由があるのかと疑問を

提示し¹⁶⁰、アテーナイとスパルタ双方が「強大で成功を取めている間に、互いに友人となるべきだ (heos de kai errometa kai eutyhoumen, philous allelois genesthai)」と主張する¹⁶¹。

シーリーによれば本稿が扱っている時期において絶大な影響力を持っていたのはカッリストラトスであった¹⁶²。彼はイピクラテスやカブリアスという当代切っつての名用兵家たちと連合し、スパルタとの戦争に倦み、テーバイへの警戒心を強めているという世論の変化を敏感に先取りしてアテーナイを指導したと言われる。前三七一年の平和も、前三七〇／六九年のスパルタとの同盟もカッリクラテスの政策であった¹⁶³。また、ボイオーティア軍のペロポネソス侵攻を阻止すべくコリントスに派遣された傭兵隊指揮官達はイピクラテス (三七〇／六九年冬)¹⁶⁴、カブリアス (三六九年)¹⁶⁵、ティモマコス (三六七年)¹⁶⁶、カレース (三六六年)¹⁶⁷であった。カレースを除いて彼らはカッリストラトスの仲間である¹⁶⁸。このようにして、前三六〇年代のアテーナイの外交政策に大きな影響を及ぼしたのはカッリストラトスであった。

アテーナイにおける党派はこれだけに留まらない。そのカッリストラトスと対立していたのがレオダマスであった¹⁶⁹。彼はカブリアスへの榮譽授与を告発し¹⁷⁰、カッリストラトスのスパルタとの和平交渉の前にテーバイとの同盟の更新を画策していた¹⁷¹。後にレオダマスはオーローポス喪失の責任を問い、カッリクラテスとカブリアスを告発している¹⁷²。

レオダマスの他にティモテウスがいる。ティモテウスはかつてカッリストラトスの仲間であったが、前三七三年にケルキュラ遠征の遅滞を咎められて指揮官を更迭された上¹⁷³、カッリステネスやイピクラテスから告発されたのである¹⁷⁴。それ以来ティモテウスはカッリストラトスと袂を分かっていた。コノーンの子という出自とその軍事的名声はティモテウスに大きな政治的影響力を与えていた。前三七〇／六九年のトリエラルコス、前三六七／六年のストラテゴスに選ばれている¹⁷⁵。そして彼はカッリストラトスと敵対していたのである。ティモテウスの仲間にはイピクラテスの仇敵ディオクレスがおり¹⁷⁶、前三五七年にはティモテウスが提案したエウボイア遠征に指揮官として参加している¹⁷⁷。

しかし、本稿が扱っている時期、アテーナイの政治に絶大な影響力を及ぼしていたのはカッリストラトスであった。それはテーバイに対する反感からスパルタへと傾斜している民衆の世論を巧みに利用し、イピクラテス、カブリアスという優れた

盟友の軍事的功績に依拠して形作られたものであった¹⁷⁸⁾。

5. ボイオーティア

テーバイによるボイオーティア諸都市の連合への統合はレウクトラの翌年オルコメノスの加盟によって完成された¹⁷⁹⁾。既にテーバイに反抗的だったプラタイア人は追放され、テスピアイは破壊されている。親スパルタ派の最後の牙城だったオルコメノスは破壊を免れたがボイオーティア連合に加入させられた。

連合におけるオルコメノスの地位について、多くの研究者はディオドロスの写本を連合のchoran（農村地区）に組み込まれたと校訂して、連合の正式の成員ではなく連合に従属する従属領と解釈している¹⁸⁰⁾。しかしそれはボイオーティアの人々を説得してオルコメノスの破壊を免れさせ、オルコメノスの寡頭派体制の存続とテーバイ人亡命者の庇護を認めたエパメイノンダスの政策と合致しない。ディオドロスは、テーバイが「オルコメノスを奴隷化する意図で (exandrapodisasthai ten polin)」大軍を擁して遠征軍を派遣したが、穏便に処遇するよう (tei philanthropiai) エパメイノンダスが「説得して (symbolousantos)」ボイオーティア連合に迎え入れた、と記しているからである¹⁸¹⁾。ディオドロス第一五巻に関する歴史的注釈を著わしたスタイリアヌーはオルコメノスがchoranではなくてpoliteian（政治組織）に組み込まれたという校訂を支持して、完全に平等な連合の成員として迎えられたと解釈するよう提案している¹⁸²⁾。

何れにせよ、オルコメノスはボイオーティアにおける唯一の寡頭派の牙城として残されたのである。ボイオーティアの寡頭派はかつての勢威を失い、駆逐されることはなかったとしても弱体化していた¹⁸³⁾。寡頭派亡命者の多くはスパルタに亡命していた。そして亡命者の多くがペロポネソスにおける戦いに参加しているのである。エパメイノンダスの第一次ペロポネソス侵攻の際には約四〇〇名のボイオーティア人亡命者がスパルタの防衛に協力し¹⁸⁴⁾、第二次ペロポネソス侵攻時には、シキュオン防衛の強化のために、小邑ポイビアに配備されていた¹⁸⁵⁾。ボイオーティアに残存していた寡頭派は各都市内にも残っていたであろうけれども、その主力はオルコメノスに結集していた。このようにしてオルコメノスは寡頭派の策源地であり続けることになった。その為にオルコメノスは前三六四年にボイオーティア連合に対して陰謀を企てた廉で破壊され、成年男子は処刑され婦女子は奴隷化されてしまうのである¹⁸⁶⁾。

前三六〇年代のボイオーティアに関する史料が絶望的なまでに貧困であるとカートレッジは指摘しているが¹⁸⁷⁾、エパメイノンダスとペロピダスに関わる断片的な情報がこの時期のボイオーティアの状況を垣間見せてくれる。

ボイオーティアは内部に深い亀裂を生じていた¹⁸⁸⁾。しかし、主要な党派の対立は民主派と寡頭派の対立ではなく、エパメイノンダスやペロピダスらのグループとその政策に反対するメネクレイダスのような人々との対立である¹⁸⁹⁾。後者をディオドロスは「彼の名声をねたむ人々 (hoi phthonountes autou tei doxei)」と記しているが¹⁹⁰⁾、クセノポンははっきりと「反対派の人々 (hoi antistasiotai)」と呼んでいる¹⁹¹⁾。彼らの標的がエパメイノンダスであったことが分かる。ペロピダスはその死に至るまでボイオータルケス職を重任するが、エパメイノンダスはボイオータルケス職に就任できなかった年もあるからである。反対派の人々が特に問題としたのはエパメイノンダスであり彼の対外政策であった。メネクレイダスは結局ペロピダスによって逆提訴され葬り去られてしまうが¹⁹²⁾、バックラーが論じるように¹⁹³⁾、エパメイノンダスやペロピダスが市民のあいだに強い人気を保持し全面的な支持を得ていたとしても、メネクレイダスのような反エパメイノンダスの人々の影響力は無視できないものだった。

エパメイノンダスはこれらの人々から一度目は法律に違反してボイオータルケスの任期を三ヶ月も越えて軍を指揮した廉で訴えられ¹⁹⁴⁾、二度目は第二次ペロポネソス遠征においてめぼしい成果を挙げなかったことから「反逆 (prodosias)」と批判されたのである¹⁹⁵⁾。その結果、エパメイノンダスは一度目の裁判では無罪の判決を得たが、二度目の裁判では大衆の怒りを買って、前三六八年のボイオータルケスに選ばれなかった¹⁹⁶⁾。

エパメイノンダスのアカイア政策も批判を受けていた。前三六七年のアカイア遠征でエパメイノンダスはアカイアがボイオーティアと同盟を結ぶ代償としてアカイアの内政に干渉せず、アカイアを指導してきた「有力者 (hoi kratistoi)」や「貴人 (hoi beltistoi)」を追放せず、また国制を変更しないことを保障したのである。アカイアはデューマー、ナウバクトス、カリュドンを実トリアとエーリスに返還させられている¹⁹⁷⁾。このエパメイノンダスの措置に異議を唱えたのがアルカディアと反エパメイノンダス派の人々 (hoi antistasiotai) であった¹⁹⁸⁾。彼らの異議を受けてエパメイノンダスの処置は撤回され、ハルモステスがアカイアへ派遣された。地元の大衆 (ho plethos) の協力を得て政権を掌握していた寡頭派を追放し、民主政を導

入している¹⁹⁹⁾。この干渉は失敗に終わった。追放された人々が直ちに反撃に転じ²⁰⁰⁾、アカイア諸都市は寡頭政を復し、スパルタとの同盟に復帰している²⁰¹⁾。

ケアリーやコークウェルはエパメイノンダスのペロポネソス積極介入をめぐって意見の対立があったと考えている²⁰²⁾。エパメイノンダスはペロポネソスに後退したスパルタをボイオーティアにとっての脅威と看做し、徹底的にスパルタを弱体化させる為にペロポネソスへの干渉を主張し、その為に必ずしも民主派イデオロギーに忠実ではなく、ボイオーティアとの同盟関係を維持する限り寡頭派との妥協、寡頭制の存続を認めようとしたのである。反対派はペロポネソス諸国の際限のない小競り合いに巻き込まれるのを恐れ²⁰³⁾、スパルタを最早脅威とは看做さず、ペロポネソスに遠征しても得る所はないと判断していた²⁰⁴⁾。そしてその背景には単なる栄光のために従軍できるような余裕を持ち合わせていない小資産家層が数多く存在していた。彼らはペロポネソスへの干渉に反対し、ボイオーティア連合の利害に直接関わる中部ギリシアに活動を限定すべきだと考えていたと指摘している。

バックラーはこのような考えに反対する。バックラーによると、メネクレイダスは党派指導者ではなく弁論家として活動したのであり²⁰⁵⁾、小農民がエパメイノンダスの戦争政策に反対して急進民主派を形成したのではなく、メネクレイダスを支持したのでもない²⁰⁶⁾。メネクレイダスがエパメイノンダスやペロピダスを弾劾し、カロンに接近して対抗しようとしたのは民主派内部の指導権がエパメイノンダスに集中するのを警戒したためだった²⁰⁷⁾。メネクレイダス自身に独自の政策というものはない、平和を追求したのもエパメイノンダスに反対するためであったと言う²⁰⁸⁾。

メネクレイダスは一介の弁論家に過ぎず、個人として政治活動したのであって、党派を率いる指導者でなかったというバックラーの反論が妥当かどうかは別にして、メネクレイダスはエパメイノンダスの独断専行を手厳しく批判し、かなりの影響力を行使していた。メネクレイダスの行動は孤立してはいなかった。エパメイノンダスに反対する人々がおおり、彼らがメネクレイダスに同調し無視しがたい政治勢力を形成していた。アカイアに対するエパメイノンダスの政策を逆転させたように、エパメイノンダスの政策に反対する人々は時にはボイオーティア人の多数を制することもあり、彼らの存在は無視できるものではなかった。この人々は民主政の理念に忠実であり、教条的で外交の現実に対しては柔軟性を欠いていた。しかしスパルタに関しては外交姿勢にエパメイノンダスと大きく異なることはなかった。彼らは反スパルタ政策遂行を望んでいた。

同盟諸国は何らかの理由でスパルタの力を頼み、その保護を期待していた。ボイオーティアのオルコメノスはテーバイの要求する覇権に自国の自治と自由そして安全への脅威を感じていた。勿論、反テーバイ政策の中心となっていたのは騎士階層の人々であった。しかし、民衆も反テーバイ政策を支持していた。

シキュオンやアカイアのように有力な政治勢力として民主派が存在しなかったところもあるが、メガラやコリントス、プレイウスやマンティネイア、テゲアやピガレイアのような国々では支配党派である寡頭派とその敵対党派である民主派との対立が見られる。これらの諸国ではスパルタの力が国内の反対派に対する盾となっていた。

ヘルミオネ、トロイゼン、エピダウロス、ハリエイスなどのアルゴリス諸都市は常にアルゴスの脅威にさらされていた。スパルタの力はこれらの諸都市の不安を解消する保証手段であった。

アクロレイア、ピサティス、トリピュリアの諸国もエーリスによる圧力を感じていた。エーリスはこれらの失地への要求を取り下げたはなかった。スパルタのみがエーリスのかかる野望を抑え得たのだ。彼らはスパルタの力を自治と自由それに安全への保証と感じていたのである。

このようにスパルタの支配は同盟国の、対外関係における自治と自由、安全の、国内治安における調和と秩序の保証と見なされ、又その機能を果たしてきたのである。それ故、同盟諸国の指導者たちはスパルタの力を信じ、その意志を高く評価してきた。しかし、スパルタの弱体化は親スパルタ政策を継続していく根拠を希薄化させてしまった。

客観的環境と心理的環境とのギャップは存在するにせよ、その格差は徐々に狭められていく。そして遂に同盟諸国はスパルタの無能力を発見するのである。その時、彼らはスパルタへの依存を止め、独自の行動を展開し始める。

民主派もスパルタの圧力をもはや脅威と感ぜず、支配党派に挑戦をはじめた。その結果、内乱がこれらの諸国を苦しめるのである。

一般に同盟諸国の離反は二つの型に分けられる。一つは国内的要因による離反で、政策決定者の交代を伴う。もう一つは国外的要因による離反で、必ずしも政策決定者の交代を伴わない。前者の場合、イデオロギーが変化の決定的な役割を果たしている。離反への動機は自律的である。後者の場合、外圧が変化の決定的な役割を果

たし、イデオロギーは補助的な役割しか有していない。この場合、離反は時には既存の体制・権力構造の維持を目的として起きている。

前者の型に属するのは、エーリス、マンティネイア、そしてクレイトルである。エーリスは民主政下であり、スパルタの支配はエーリスからアクロレイア、ピサテイス、トリュリアを奪い去った。マンティネイアは寡頭政から民主政に移行し、民主政理念を基盤とするアルカディア連合形成を試みたのである。スパルタは現状の変更を認めなかった。クレイトルはオルコメノスと対立していた。そしてオルコメノスは熱心な親スパルタ派であった。

後者の型に属するのはボイオーティアのオルコメノス、ポーキス、アイトリア、ロクリス、ヘーラクレイア、テゲア、パッランティオン、シキュオン、ペッレーネー、アカイア、ヘライアを含む西アルカディア、ステュンバロスを含む北アルカディア、コリントス、プレイウス、エピダウロスとその他の同盟諸国である。

民主政や寡頭政、エトノスの統合をめぐるイデオロギーは確かに対外行動を規定する一つの座標軸ではあるが、支配的地位や政治的影響力の確保という非イデオロギー的規範も重要な役割を果たしていたことが分かる。シキュオンやペッレーネー、アカイア、或いはコリントスやプレイウスに代表されるように、離反を決定したのは寡頭派の人々であった。これらの人々は国家の安全と利益、そしてそれらと密接に絡み合った自分たちの私的な利益という観点から政策を決定したのである。

諸都市はイデオロギー的規範と非イデオロギー的規範を二つの座標軸として行動したのである。このことは同盟諸国に限らず、非同盟諸国にも当て嵌まる。全てをイデオロギーに還元しようとする説明は物事の半分しか説明できない。それは確かにダイナミックな見解であるが、十分ではない。我々は矛盾し合う事実を分析し、評価しなければならない。

本稿は当初『社会科学』74号に掲載する予定で準備を進めておりましたが、第4研究の特集号の企画、両親の入院と父の死、私自身の在外研究のために本号に掲載することになりました。

- 1) アゲーシラーオスとアゲーシラーオス時代のスパルタの外交を論じたカートレッジはスパルタ外交の特徴を同盟諸国の寡頭派とスパルタの政治エリートたちとの様々な種類の友情に基づく同盟関係が政治の本質であって、同盟を動かす車の潤滑油であったと評価する。P. Cartledge, *Agasilaos and the Crisis of Sparta*, London, 1987, 243.
- 2) Xen. *Hell.* 4. 2. 11-12.
- 3) G. L. Cawkwell, 'The Decline of Sparta,' *CQ.* n.s. 33 (1983), 385-400. esp. 395.
- 4) D. S. 15. 1-5.
- 5) D. S. 15. 40. 3-5.
- 6) E.g. G. Grote, *History of Greece*, London, 1869, X. 271 n.1; E. Meyer, *Geschichte des Altertums*, Stuttgart u. Berlin, 1902, v. 420; K. J. Beloch, *Griechische Geschichte*, III. 1. Berlin, 1967 Nachdruck (Berlin u. Leipzig, 1922), 174 nn.2, 4; G. Glotz and R. Cohen, *Histoire Greque*, Paris, 1941, III. 151 n.22; N. G. L. Hammond, *A History of Greece, Oxford*, 495; P. Cartledge, *Sparta and Laconia: A Regional History c. 1300-362 BC*, London, 1979, 296; id., 1987, 266; J. Buckler, *The Theban Hegemony, 371-362 BC*, Cambridge, Mass., 1980, 292 n.1; J. Roy, 'Thebes in the 360s,' *CAH*, 2nd ed., VI, 1994, 189. n.4. スタイリアヌーはディオドロス（エフォロス）のこの箇所の記事は前375年の平和条約の締結のあとのペロポネソスで生じた内乱を証言しているとする。P. J. Stylianou, *A Historical Commentary on Diodorus Siculus Book 15*, Oxford, 1998, 330-2. J. Roy, 'Diodorus Siculus XV 40 - The Peloponnesian Revolutions of 374 B. C.,' *Klio*, 50 (1973), 135-9, esp.139.
- 7) Roy, 1973, 138.
- 8) D. S. 14. 40. 1: pollous ton agathon andron ephygadeuon kai kriseis epiballousai sykophantodeis kate-dikazon. dioper eis staseis empiptousai phygas kai demeuseis ousion epoiounto, malista de pros tous epi tes Lakedaimonion hegemonies proestekotas ton patridon. (立派な人々の多くを追放し職業的告発人に告訴させて有罪の判決を下したのだった。その結果内乱に陥り、とりわけラケダイモン人の覇権の時代に祖国を支配した人々に対して、追放し財産を没収したのだった。)は寡頭派の人々にとって苦い記憶として残っていたに違いない。
- 9) D. S. 15. 59. 2-3. Xen. *Hell.* 6. 5. 7-9.
- 10) Buckler, 1980, 70.
- 11) E. David, *Sparta between Empire and Revolution (404-243 B.C.): Internal Problems and their Impact on Contemporary Greek Consciousness*, Salem, 1986^{cap}. 81-2; D. S. XV. 57. 3-58. cf. Isoc. 5. 52; Plut. *Mor.* 814b. この時期の各都市の亡命者の数についてトンプソンがまとめている。see W. E. Thompson, 'The Politics of Phlius,' *Eranos* 68 (1970), 229, n.19.
- 12) Stylianou, 1998, 414.
- 13) Xen. *Hell.* 6. 5. 29; 7. 2. 2-3.
- 14) 例えばブレイウス:(前三七〇年) Xen. *Hell.* 7. 2. 4; (前三六九年) Xen. *Hell.* 7. 2. 5-9; (前三六八年) Xen. *Hell.* 7. 2. 10; (前三六六年) Xen. *Hell.* 7. 2. 1; 11-23; 4. 9. J. Buckler, 1980, 70-109, 185-201.
- 15) J. Roy, 'Arcadia and Boeotia in Peloponnesian Affaires, 370-362 B.C.,' *Hist.* 20 (1971), 569-99, esp.585-90.
- 16) 585.
- 17) アルカディア連合の外交政策の特徴についてはRoy, 1971. 572.

- 18) 589.
- 19) 590.
- 20) Xen. *Hell.* 6. 5. 10; D. S. 15. 59. 2; 77. 1.
- 21) マンティネイアについてはRoy, 1971, 569-99, esp.570.を参照。
- 22) Thuc. 5. 80.
- 23) Thuc. 5. 29, 80.
- 24) Xen. *Hell.* 5. 2. 6; D.S. 15. 12. 2.
- 25) Xen. *Hell.* 6. 5. 3.
- 26) Xen. *Hell.* 6. 5. 4.
- 27) Xen. *Hell.* 6. 5. 5.
- 28) Grote. 1869, 188; Thuc. 4. 134, 5. 61, 64, 67, 77. ペロポネソス同盟の中におけるテゲアの特別な地位についてはHdt. 9. 26.を参照のこと。テゲアの民主派革命についてはRoy, 1971, 570.
- 29) Xen. *Hell.* 6. 5. 6-7.
- 30) Xen. *Hell.* 6. 5. 7: 民主派が民衆の加担を期待していたにもかかわらず民衆は何の行動もしていない。
- 31) 実際民主派の蜂起に民衆が加担していないことから明らかである。
- 32) Xen. *Hell.* 6. 5. 7.
- 33) Xen. *Hell.* 6. 5. 7.
- 34) Xen. *Hell.* 6. 5. 9, D.S. 15. 59. 2.
- 35) Xen. *Hell.* 6. 5. 9.
- 36) Xen. *Hell.* 6. 5. 10, D.S. 15. 59. 2.
- 37) Thuc. 4. 134. 5. 67; Xen. *Hell.* 7. 5. 4: パランティオンは常にテゲアと同じ政策を採用している。
- 38) Xen. *Hell.* 6. 5. 9; D.S. 15. 59. 2.
- 39) ekdothentes: D.S. 15. 59. 3.
- 40) J. Roy, 'Orchomenus and Clitor,' *CQ.* n.s. 22 (1972), 79.
- 41) W. E. Thompson, 'Arcadian Factionalism,' *Hist.* 32 (1983), 149-60. トンプソンはマンティネイアの beltistoi とテゲア民主派が連合の政策をめぐって対立していたと考える。そして前三六四年まで beltistoi がアルカディアの政治に大きく関わってきたと言う。
- 42) Cartledge, 1987, 262.
- 43) 前四一八年: Thuc. 5. 61-63, 77; 前三七〇年: Xen. *Hell.* 6. 5. 11.
- 44) Xen. *Hell.* 5. 4. 36-37; J. A. O. Larsen, *Greek Federal States: Their Institutions and History*, Oxford, 185.
- 45) Thuc. 5. 61.
- 46) Xen. *Hell.* 6. 5. 13-14.
- 47) Xen. *Hell.* 6. 5. 22.
- 48) Xen. *Hell.* 4. 4. 1-6; D. S. 14. 86. 1, 92. 1. cf. G. T. Griffith, 'The Union of Corinth and Argos (392-386 B.C.);' *Hist.* 1 (1950), 236-56, esp.247-8. グリフィスはこれをイソポリテイアと見ている。
- 49) Xen. *Hell.* 15. 1. 31: tas de allas Hellenidas poleis kai mikras kai megalas autonomous apheinai plen Lemnou kai Imbrou kai Skyrou' (レムノス, インブロス並びにスキュロスを除くギリシアにあるその他の都市は大小に関わらず自治たることが許されるべし。); D. S. 14. 110. 3: tous d' allous Hellenidas poleis hapantas autonomous einai' (その他のギリシアにある全ての都市は自治たるべきこと。) という『大王の和約』に見られる条項はアルゴスとの合同の解消と亡命者の帰国を意味している。Cf.

Xen. *Hell.* 15. 1. 34: exelthon hoi Argeioi kai aute eph' heautes he ton Korinthon polis egeneto, hoi men sphageis kai hoi metaitioi tou ergou autoi gnontes apelthon ek tes Korinthou' hoi d' alloi politai hekontes katedechonto tous prosthen pheugontas. (アルゴス人が退去しコリントス人の都市が自治を回復したので、虐殺を行った人々やそれに加わった人々はコリントスから自主的に退去し、残りの市民はかつての亡命者達を自発的に迎え入れたのである。)

- 50) Xen. *Hell.* 5. 1. 34.
- 51) D. S. 15. 40. 3.
- 52) D. S. 15. 40. 3.
- 53) Xen. *Hell.* 6. 4. 18.
- 54) Xen. *Hell.* 6. 5. 37.
- 55) Xen. *Hell.* 6. 5. 40.
- 56) Xen. *Hell.* 6. 5. 29, 7. 2. 2-3.
- 57) Xen. *Hell.* 7. 1. 40.
- 58) エパメイノンダスの第一次遠征：Xen. *Hell.* 6. 5. 52; Plut. *Pelop.* 24. 5.
 エパメイノンダスの第二次遠征：Xen. *Hell.* 7. 1. 15; D. S. 15. 68. 3.
 エパメイノンダスの第三次遠征：Xen. *Hell.* 7. 1. 42.
- 59) Xen. *Hell.* 6. 5. 52; Plut. *Pelop.* 24. 5.
- 60) D.S. 15. 68. 1.
- 61) Xen. *Hell.* 7. 1. 19; D.S. 15. 69. 3-4.
- 62) Xen. *Hell.* 7. 1. 22.
- 63) Xen. *Hell.* 7. 2. 21-22.
- 64) Xen. *Hell.* 7. 4. 5.
- 65) Xen. *Hell.* 7. 4. 4.
- 66) Xen. *Hell.* 7. 4. 5.
- 67) Xen. *Hell.* 7. 4. 6.
- 68) Xen. *Hell.* 7. 4. 8.
- 69) Xen. *Hell.* 7. 4. 9.
- 70) Xen. *Hell.* 7. 4. 11. この平和条約についてはT. T. B. Ryder, 'The Supposed Common Peace of 366/ 365 BC,' *CQ.* n.s. 7 (1957), 199-205.の考察がある。ライダーはD. S. 15. 76. 3.の共通平和がクセノポンの単独講和条約と同じであって、テーバイがコリントスなどとの講和条約を共通平和と称したに過ぎないとする(204)。コリントス寡頭派がポイオーティアとの講和に踏み切った理由としてCartledge, 1987, 257は戦争を継続する目的や利益を全く見出せなかった為と指摘している。
- 71) J. B. Salmon, *Wealthy Corinth: A History of the City to 338 B.C.*, Oxford, 1984, 375.
- 72) 379; 383-6.
- 73) R. P. Legon, 'Phliasian Politics and Policy in the Early Fourth Century B. C.,' *Hist.* 16 (1967), 324-37. cf. W. E. Thompson, 'The Politics of Phlius,' *Eranos* 68 (1970), 224-30. トンプソンはプレイウスにおいては党派間のイデオロギー上の相違は小さなものであって、親スパルタか反スパルタかの違いに過ぎないとして、リーガンを批判している。Xen. *Hell.* 5. 3. 25のepeita de nomous theinai, kath' hous politeusintoをどのように解釈するのかが問題となる。リーガンはプレイウスの政治体制を意味すると解し、トンプソンは国事を運営していく際の協定と理解している。私自身はリーガンの解釈が自然

だと判断する。

- 74) Xen. *Hell.* 5. 3. 13. カートレッジはボダメノスを寡頭派の中の過激派、プロクレスを穏和派とするが、両者の違いは世代の違いでしかない。Cartledge, 1987, 266.
- 75) Xen. *Hell.* 5. 3. 25. 政治裁判の実施と国制の変革, 守備隊の設置。
- 76) D. S. 15. 40. 5. Stylianou, 1998, 336-7.
- 77) Xen. *Hell.* 7. 2. 6-9. Thompson, 1970, 230, n.20. プレイウスの政治体制については分からないとしている。
- 78) Xen. *Hell.* 6. 5. 39-40.
- 79) Xen. *Hell.* 6. 5. 29, 7. 2. 2-3.
- 80) Xen. *Hell.* 7. 1. 1; D.S. 15. 67. 1.
- 81) Xen. *Hell.* 7. 2. 4.
- 82) Xen. *Hell.* 7. 2. 1, 17-18.
- 83) Xen. *Hell.* 7. 2. 11-13.
- 84) D. S. 15. 40. 4. Stylianou, 1998, 336.
- 85) Paus. 6. 3. 2-3.
- 86) Paus. 9. 15. 4.
- 87) Polyæn. 5. 16. 4.
- 88) Xen. *Hell.* 7. 3. 2; D.S. 15. 69. 1.
- 89) A. Griffith, *Sikyon*, Oxford, 1982, 68-73.
- 90) Griffith, 1982, 72.
- 91) Xen. *Hell.* 7. 1. 11.
- 92) D.S. 15. 70. 3; Xen. *Hell.* 7. 1. 46.
- 93) Xen. *Hell.* 7. 1. 45.
- 94) Xen. *Hell.* 7. 1. 41; D.S. 15. 72. 3. クロノロジーの問題についてはGriffith, 1982, 71の指摘を参照。
- 95) Xen. *Hell.* 7. 3. 1.
- 96) Xen. *Hell.* 7. 1. 46.
- 97) Xen. *Hell.* 7. 3. 5.
- 98) Griffith, 1982, 75. エウプロンの暗殺後, シキュオンで政権を掌握したのはエウプロンの子アデアスを指導者とする民主派であり, アデアスの後はエウプロン二世が父の地位を継承している。
- 99) Xen. *Hell.* 7. 1. 44. エウプロンのクーデタについてはGriffith, 1982, 68-71を参照のこと。
- 100) Thuc. 5. 82. 1; Larsen, 1968, 87; Stylianou, 1998, 481.
- 101) D. S. 15. 75. 2.
- 102) Stylianou, 1998, 481; Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 103) Cartledge, 1987, 388.
- 104) Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 105) Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 106) Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 107) Griffith, 1982, 68.
- 108) カートレッジはクセニアス派亡命者が実際には帰国したと「推定されねばならない」と論じる。しかしカートレッジはその根拠を提示していないし, アーギスが亡命者をエピタリオンに配備したこ

- とを亡命者が帰国したであろうことの「明確な含意」としているが決して「明確」ではない。むしろそのような「含意」から「推定」することに無理がある。この件についてのクセノポンの沈黙と講和条約においてスパルタが寡頭派政権という意味でのsophrosyneを求めなかったというカートレッジ自身の評価は亡命者の帰国を「推定されねばならない」という主張に疑問を投げ掛けるものである。Cf. Cartledge, 1987, 251.
- 109) D.S. 14. 34. 1; Paus. 5. 6. 5; Xen. *Hell.* 3. 2. 30.
- 110) Xen. *Hell.* 6. 5. 3.
- 111) マンティネイア再建に資金提供: Xen. *Hell.* 6. 5. 5.
 アテーナイ及びボイオーティアへの使節派遣: D. S. 15. 62. 3; Dem. 16. 12; Paus. 14. 4.
 エパメイノングスの第一次ペロポネソス遠征とラコニア侵攻: Xen. *Hell.* 6. 5. 23-26.
 第一次ブレイウス侵攻: Xen. *Hell.* 7. 1. 25-26.
 Cartledge, 1987, 253はレウクトラ以降のエーリスの外交の軌跡を要領よくまとめている。
- 112) Roy, 1971, 575.
- 113) Xen. *Hell.* 7. 1. 26.
- 114) Xen. *Hell.* 7. 1. 30-32; D.S. 15. 72. 3; Plut. *Ages.* 33.
- 115) Xen. *Hell.* 7. 1. 36. cf. 38. Plut. *Pelop.* 30.
- 116) Xen. *Hell.* 7. 1. 38.
- 117) Xen. *Hell.* 7. 1. 40.
- 118) Stylianou, 1998, 414.
- 119) Thuc. 5. 14; 28; D.S. 14. 6. 2.
- 120) Thuc. 5. 81.
- 121) Thuc. 5. 82-83.
- 122) *Hell. Oxy.* 2. 2.
- 123) *Hell. Oxy.* 2. 2.
- 124) Xen. *Hell.* 3. 5. 1-2.
- 125) D. S. 15. 57. 3-58; Isoc. 5. 52 (autoi tous endoxotatous kai plousiotatous ton politon apollyousi: 彼ら自身はもっとも著名で富裕な市民を殲滅したのだ); Dion. Hal. *Ant.* 7.66.5(hoia Kerkyraioi te kata ten stasin eirgasanto kai Argeioi kai Milesioi kai Sikelia pasa kai syknai allai poleis.: ケルキュラ人やアルゴス人, ミレトス人やシケリア全体, それに数多くのその他の諸都市が革命の際に行ったように); Plut. *Mor.* 814b(skytalismon, en hoi pentakosious kai chilious aneirekesan ex hauton hoi Argeioi: スキュタリスモス, その事件でアルゴス人は彼らの中から一五〇〇名を殺害した); Ael. Arist. *Panath.* 273d; 311d(to goun Argeion plethos nosoun hysteron: 後にアルゴス人の大衆が狂気に陥ったとき); Helladius ap. Phot. Cod. 279.
- 126) H. Swoboda, 'Skytalisimos,' *Hermes* 53 (1918), 94-101. スヴォボダはスキュタリスモスをレウクトラの後ペロポネソス各地の民主派革命に触発されて起きたと考えている。
- 127) E. David, 'Aeneas Tacticus, 11.7-10 and the Argive Revolution of 370 B.C.," *AJP* 107 (1986), 343-9.
- 128) D. S. 15. 57. 3-58. 4.
- 129) Stylianou, 1998, 415.
- 130) A. Fucks, 'Patterns and Types of social-economic Revolution in Greece from the fourth to the second Century B.C.," *Anc. Soc.* 5 (1974), 51-81, esp.72.

- 131) David, 1986, 345-6. cf. Arist. *Pol.* 1304b 20-24.
- 132) David, 1986, 348.
- 133) Cf. Aeneas Tac. 11. 7-10.
- 134) D.S. 15. 59. 4, 62. 1.
- 135) Xen. *Hell.* 6. 3. 1.
- 136) Xen. *Hell.* 6. 3. 1-2.
- 137) Xen. *Hell.* 6. 4. 19.
- 138) Xen. *Hell.* 6. 5. 1-3, D.S. 15. 30. 2, Aesch. 2. 70. エパメイノンダスの第一次ペロポネソス侵攻の際、アテーナイはスパルタとテーバイとの連携、第二アテーナイ海上同盟加盟諸国をテーバイが篡奪し自らの同盟に組み込もうとしているのを阻止しようとしていたとカートレッジは論じる。Cartledge, 1987, 309.
- 139) Xen. *Hell.* 6. 5. 35.
- 140) Xen. *Hell.* 7. 1. 1-14.
- 141) Xen. *Hell.* 7. 1. 14.
- 142) Roy, 1994, 188.
- 143) 188.
- 144) Xen. *Hell.* 6. 3. 4-6 (カッリアス) ; 7-9 (アウトクレス) ; 10-17 (カッリストラトス)
- 145) Xen. *Hell.* 6. 3. 4.
- 146) Xen. *Hell.* 6. 3. 5.
- 147) Xen. *Hell.* 6. 3. 7.
- 148) Xen. *Hell.* 6. 3. 8-9.
- 149) クロシエはアウトクレスをカッリストラトスの反対派のスポークスマンと位置付けている。しかし、カッリストラトスの反対派をアウトクレスに一元化していることはこの当時のアテーナイの党派を余りにも単純化している。P. Cloché, 'La Politique de l'athénien Callistratos (391-361 avant J.-C.)', *REA* 25 (1923), 5-32. esp. 23.
- 150) Sealey, 1956. 193.
- 151) Aesch. 3. 139. しかしクロシエによると、アリストポンはその有名なテーバイ最良にも関わらず、テーバイの膨張がアテーナイを脅かしていると見るやテーバイを抑制する政策を提唱している。Cloché, 1923, 30-1.
- 152) Cloché, 1923, 30: クロシエはアリストボンがカッリストラトスの政敵ではなく、前三六一年にカッリストラトスが裁判に敗れて亡命するまでその政策に協力したと指摘する。
- 153) Cf. Xen. *Hell.* 6, 3, 2: proton men eis Thebais presbeis epempse parakalountas akolouthein, ei boulointo, eis Lakedaimona peri eirenes (さて彼らは最初にテーバイへ使節を派遣しもし望むなら平和についてラケダイモンへ一緒に行こうと誘ったのであった。)
- 154) Xen. *Hell.* 6. 3. 2: Demonstratos Aristophontos
- 155) Sealey, 1956, 194; Schol. Aesch. I, 64. Dem. 8. 30ではカレースはe Chares e Aristophon (カレースにしてもアリストボンにしても)とアリストボンと併置して挙げられている。
- 156) Xen. *Hell.* 7. 2. 19; D.S. 15. 75. 3. W. E. Thompson, 'Chares at Phlius,' *Philologus* 127 (1983), 303-5.
- 157) Xen. *Hell.* 7. 4. 5.
- 158) Xen. *Hell.* 6. 3. 15.

- 159) Xen. *Hell.* 6. 3. 10.
- 160) Xen. *Hell.* 6. 3. 15.
- 161) Xen. *Hell.* 6. 3. 17.
- 162) R. Sealey, 'Callistratos of Aphidna and his Contemporaries,' *Hist.* 5 (1956), 178-203. esp.192-4.
- 163) もっともシーラーによれば、三七一年の平和はカッリストラトスだけの仕事ではなくアリストポンの協力の賜物でもある。使節の中にメラノポスの名前が挙がっているが (Xen. *Hell.* 6. 3. 2), メラノポスは有名なラケースの孫で名門に属している。デモストラトスはアリストポンの息子であり、アウトクレスはアリストポンの友人であるとされる。Sealey, 1956, 193.
- 164) Xen. *Hell.* 6. 5. 49-52; Paus. 9. 14. 6.
- 165) Xen. *Hell.* 7. 1. 25; cf. Paus. 9. 15. 4.
- 166) Xen. *Hell.* 7. 1. 41.
- 167) Xen. *Hell.* 7. 2. 18-23; D. S. 15. 75. 3.
- 168) Sealey, 1956, 194 : テイモマコスがカッリストラトスの娘と結婚していた。cf. Dem. 50, 48.
- 169) レオダマスについてはN. Fisher, *Aeschines: Against Timarchos*, Oxford, 2001, 206-7を参照のこと。クロシエは前四〇四年の寡頭派の生き残りとする。Cloché, 1923, 27.
- 170) Dem. 20. 146: houtos egrapsato ten Chabriou dorean (この人物はカプリアスへの授与を告発し)
- 171) Aesch. 3. 138:kaitoi pollas men proteron presbeias epresbeusan eis Thebas hoi malista iokeos ekeinois diakeimenoi, ...(Thrasymboulos, Thrason)..., Leodamas ho Acharneus, ouch hetton Demosthenous legein dynamenos all' emoige kai hedion, (そしてテーバイと非常に密接に連合した人々は何度でも彼らの許に使節として使いし,... (トラシュブロス, トラソン)..., アカルナイのレオダマスはデモステネスと同じように手だれた弁士であったが、私の見解ではより愛想のある人であった,)
- 172) Arist. *Rhet.* I. 1364a 13.
- 173) Xen. *Hell.* 6. 2. 13.
- 174) Dem 49. 9.
- 175) Sealey, 1956, 194.
- 176) Dem. 21. 62.
- 177) Dem. 8. 75; 21. 174.
- 178) 社会的安定性と政治指導者が中産階級という単一の社会階層によって形成されているという前四世紀のアテーナイの構造的特性も国論がスタシスに引き裂かれなかったこの時期のアテーナイを考える上で重要である。S. Perlman., 'The Politicians in the Athenian Democracy of the Fourth Century B. C.' *Athenaeum* 41 (1963), 327-55.
- 179) 歴史的・社会的背景からボイオーティアを単一の単位として捉えず、オルコメノスを中心とするコーパイス湖北西とテーバイを中心とする南東の二つのボイオーティアを指摘するのがファリネッティである。E. Farinetti, 'Boeotian Orchomenos. A Progressive Creation of a Polis Identity,' in: E. Forsten (ed.), *Construction of Greek Past: Identity and Historical Consciousness from Antiquity to the Present*. Groningen, 2003, 1-20.
- 180) E.g. Buckler, 1980. 66, 291 n.33; R. J. Buck, *Boiotia and the Boiotian League, 432-371 B.C.*, Edmonton, 1994, 120.
- 181) D. S. 15. 57. 1.
- 182) Stylianou, 1998, 411.

- 183) Buck, 1994, 111.
- 184) D. S. 15. 65. 6.
- 185) Paus. 9. 15. 4.
- 186) D. S. 15. 79. 3-6.
- 187) Cartledge, 1987, 312.
- 188) 310.
- 189) 二つのエパメイノンダス裁判の時期に関する論争についてはJ. Wiseman, 'Epaminondas and the Theban Invasions,' *Klio* 51 (1969), 177-99. esp.187-91を参照のこと。大きくは本稿が依拠しているペロッホの高年代説(三六九年と三六七年)とハモンドの低年代説(三六八年と三六六年)がある(Beloch, *Griechische Geschichte*, III. 2, Berlin, 1967 Nachdruck (Berlin u. Leipzig, 1923), 247-9; Hammond, 1967, 665)。本稿では年代についての検討はせず、ペロッホの高年代に従って論を進めていく。
- 190) D. S. 15. 72. 2.
- 191) Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 192) Plut. *Pelop.* 25. 4.
- 193) Buckler, 1980, 130.
- 194) Plut. *Pelop.* 24-5.
- 195) D. S. 15. 72. 2.
- 196) D. S. 15. 72. 2: epenegkanton oun antoi prodosias egklema to plethos paraxynthen apestesen auton tes boiotarchias (さて彼らは彼に対して裏切りの嫌疑を掛けたのであるが大衆は怒りに燃えて彼をポイオータルケスの職から解任したのであった)。二度目の裁判が実際に行われ、有罪となったかどうかは確認できない。反対派の人々がエパメイノンダスに裏切りの嫌疑を掛けたのであって、彼らが訴訟にまで持ち込んだのかどうか、エパメイノンダスが有罪の判決を受けたのかどうかは分からない。もし「裏切り」を訴因とする公判が開かれたとするなら、無罪でない限りエパメイノンダスの死刑は免れがたいものであったろう。次年度のポイオータルケスに選出しないというのは司法判決たりえない。See G. L. Cawkwell, 'Epaminondas and Thebes,' *CQ* n.s. 22 (1972), 254-78, esp.276-8.
- 197) D.S. 15. 75. 2.
- 198) Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 199) Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 200) Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 201) Griffith, 1982, 68.
- 202) M. Cary, 'The Trial of Epaminondas,' *CQ* n.s. 18 (1924), 182-4, esp.183; Cawkwell, 1972, 267.
- 203) Cawkwell, 1972, 267.
- 204) Cary, 1924, 183.
- 205) Buckler, 1980, 149.
- 206) 149.
- 207) 142-3.
- 208) 149.